OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	解体としての合一 : ムージルの『愛の完成』について
Author(s)	北島, 玲子
Citation	独文学報. 1988, 4, p. 57-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

解体としての合一

―ムージルの『愛の完成』について―

北　島　玲　子

1

時折明瞭にとらえられるイメージを頼りに、果てもなく続く連想の霧の中を手探りで読み進まねばならないようなムージル（Robert Musil）の短編小説『愛の完成』*Die Vollendung der Liebe* は、その表題及び、この作品がもうひとつの短編小説『静かなヴェローニカの誘惑』*Die Versuchung der stillen Veronika* と共に出版された際の『合一』*Vereinigungen* という総合タイトル故に、あるひとつの読みへと読者を誘なう。すなわち、旅先で知り合った行きずりの男との不貞を通して、遠く離れた夫との愛を完成させる物語という読みへと。

物語の冒頭では、夫と妻とが精神的に深く結ばれている様が、黄昏時の室内を背景に、微妙な色彩と比喩の中で、精妙な一幅の絵のように描かれている。部屋を支配しているのは静止のイメージである。銀のポットからカップに注がれる紅茶は、「麦わら色の軽いトパーズでできた、よじれた透明な柱」（6－156）となって静止し、壁に映る光は黄金色のレースに凝固する。物も時間もじっと黙したまま、やがて二人の周囲には幾千もの面を持つ結晶が形成される。二人は寸法の合った半球同志のようにぴったりと重なり合い、お互いなしでは生きられないのを感じている。しかしながら、「彼らはお互いの存在のほかは何も感じていなかった。にもかかわらず、―― すでにごく小さくなって、闇の中に消えようとしながらも ―― なおもひとつの感情が、天空の四方に向かって拡がるかのように存在した」（6－160）という冒頭の場面のしめくくりには、外界から閉ざされた小宇宙の中に休らっている二人の関係に、ひそやかなあなの穿たれていることが暗示されている。妻のクラウディーネは、一人で娘のリリー

を寄宿舎に訪ねに行く。夫は、急いで仕上げねばならない仕事のために同行できないのである。列車に揺られながらもの思いに耽る彼女の前に、一人の男が現われる。雪に降り込められて音信不通となったかの地で、彼女はつきまとう男に嫌悪の念を抱きながらも、男によって欲情を促され、男を部屋に入れさえする。けれども、欲望にとらえられ、夫に対する不実の念を意識しながら、それを夫との内なる合一だと感じとるのである。「私たちは互いを目指してやってきました。ひそやかに空間と年月を通り抜けて。今や私は苦しい道を通ってあなたの中へ入りこむのです。」(6－190)

ムージル自身の「不実はより深い内部領域において合一たり得る」[1]という言葉もあり、このような道筋をつけてこの作品を解釈する論者には事欠かない。例えば、アルンツェン(H. Arntzen)は、「この物語は『静かなヴェローニカの誘惑』とほぼ同じ時期に成立し、多くの点でそれと類似しているが、構造は異なっている。外的な出来事が[……]ほとんど完全に消え去っているわけではなく、はっきりと現われさえしているという点ですでにそうである。すなわち、一人の婦人が旅先で夫に不実を犯すのである」として、この物語の中心をクラウディーネの不実に据えた上で、「クラウディーネの不実は愛の物語、もしくは一人の役人との単なる性的関係の物語として語られているのではない」、「不実はむしろクラウディーネにとっては、まさに『愛の完成』を意味している」[2]と述べている。

それでは、不実が夫との合一たり得るという一見逆説めいた事態は、どのようにして可能なのだろうか。それは、この作品においてはいかにもムージルにふさわしく、男女間の微妙な心理の綾を穿ったものとして描かれているのではなく、[3] 現実とは何かということに関するムージル独自の認識と不可分であり、それの論理的帰結なのである。

クラウディーネは、現在の夫と知り合うまでは奔放な生活を送っていた。娘のリリーも、前の夫と結婚していた時に別の男との間に生まれた子供なのである。彼女は何人もの男たちに屈辱的といってよいほどの情熱で自分を投げ出し、その行為に苦しめられながらも、そのような体験が、結局は自分の心に触れることは決してないのだという意識を絶えず持ち続ける。

一人の不幸な、ありふれた、身持ちの悪い女のこのような行ないは、

> 小川のようにさらさらと彼女のもとから流れ去ったが、彼女は、身動きもせず、思いに耽りながら小川のほとりに座っているという気持ちしか抱かなかった。(6 −160f.)

このような現実からの疎外感、現実に対する無感覚それ自体は、ことさら注目するまでもないありふれたものと言えよう。しかしながら、このような感覚を背後で支えているのは、ムージルの作品の登場人物たちに共通する現実把握、すなわち、現実の体験とは、無数の可能性の排除の上に成り立った偶然のものに過ぎないという意識である。だからこそ、今の夫と知り会ってからの、苦しみを過去に沈めてしまった生活を、旅の途中のクラウディーネは次のように振り返るのである。

> 愛する人たちとの関係においては、たくさんの問が考え尽されぬままに残るものである。共同の生活は、そのような問いが考え尽されるのを待たずに、そのような問いを乗り越えて築き上げられなくてはならない。そして後になると出来上がったものは、それとは別な風に思い浮かべるだけの余地さえもはや残さない。そうなると、どこか道端に奇妙な杭が立っていたり、ひとつの顔があったり、香りがたゆたっていたり、まだ人の足の踏み入ったことのない小径が石がちの草むらの中へ消えているのが見えて、引き返さなければならない、見に行かなければならないとわかっていても、すべては前へ前へと突き進んでゆく。(6 −163)

現実において何かを築き上げるということは、一瞬一瞬において無数に存在するはずの可能性の中から、その都度ひとつの可能性を選び出し、それを一本の糸に繰りなしてゆくことなのである。人間の生とは、「黙してそびえ立つ物の間で自分自身にしがみつくために、ひとすじの線を、ともかくもまとまりをつけるだけの線を彫り込んでいく」(6 −185) ことなのである。別の可能性、別の糸に心魅かれても、それに目を止めることもせずに、「生の一点が隙間なく他の点につながること」(6 −187) だけに留意しながら。ましてや、愛という共同作業の場においては、「たえまない前進による平衡」(6 −164) を保たんがために、「手に手を取って」

ひたすらに走り続けなければならない。

しかしながら、突然「立ち止まってみたいという誘惑」に駆られればどうであろう。必然ないし自明のものと見えていた現実、現にある以外の姿を想像することもできないかに思えていた現実が、実は様々な「制度」によって切り取られ、固定化された偶然のものに過ぎないということがわかるのである。唯一無二の現実であると思っていたものは、無数の可能性のひとつに過ぎないのである。「おれは偶然に過ぎない、と必然性が自嘲した」(1－128)、「何故すべてが、よりによって現在のようになったのかということに対する充分な根拠は、どこにも見つけられない。別な風になることもあり得たかもしれない」(1－131)という『特性のない男』*Der Mann ohne Eigenschaften* の一節がここにもあてはまる。クラウディーネの旅は、これまで夫との幸福な生活の最中にあって時折襲われた、「ただの事実に過ぎない、ほとんど偶然に過ぎないという意識」(6－164)が顕在化する過程なのである。

現にそうである存在様式の必然性が無根拠であるならば、したがって愛する人との関係も恣意の結果に過ぎないのであれば、そこから、「自分は他の男のものになれるかもしれない」(6－165)という想念は当然のこととして生じてくる。他の営みと同様、夫との愛もまた、「ぱっくりと恐ろしい口をひらいている偶然性」(6－185)から身を守るべく、瞬間瞬間を隙間なくつなげてきた結果に過ぎないのであれば、別の人との間にもそうした関係を築くことはできたのである。夫を愛することと、他の人を愛することとは、自分の揺るぎなさを得んがために一人の人間にしがみついているという点では等価なのだ。

これまでともかくも一本の糸に沿って織りなしてきた現実が偶然に過ぎないという認識に身をさらすということは、「どの言葉も前の言葉につながり、次の言葉を必要とする」(6－185)という連繋によって聞くまいとしてきた沈黙に耳を傾けることであり、これまで目をそらせてきた、すべてを何の区別もなく呑み尽して黒々と拡がる「盲目の巨大な虚空」(6－167)と向き合うことである。自分の生の必然性への確信が崩れるや、クラウディーネの前に世界は、分節化以前の混沌とした、にもかかわらず、いかなる出来事も生じていないが故の黙した姿を見せる。「混沌とした沈黙」(das wirre Schweigen)(6－165)、「奇妙に興奮した空

虚」(sonderbar erregte Leere)(6－172)、「熱に浮かされたような空虚なはるけさの白い影絵」(das weiße Schattenspiel der fieberhaft leeren Weite)(6－176)などの表現が随所に見られ、無であると同時に巨大な生成のエネルギーを潜ませた世界の様相が表現されている。そのような無といい、虚無といい、それらはすべてを現出せしめる場、現実としてついには立ち現われることのなかったものが可能態として潜む場なのである。したがって、そのような無に向かい合うということは、現実をひたすらに紡ぎあげている時には見えぬものに目を凝らし、聞こえぬものに耳を傾けることである。

> 彼女は突然身震いしながら感じた。さまざまの声が世界を渡って行くのを。金属でできた鳴り響く町のように、いくつもの塔を持ち、重々しく、理性とは異なる何かを……それは、日常的な理性の世界とは、随意にしか、偶然にしか、ひっそりと束の間にしか結びつかない、ひとつの独立した把えがたい感情の世界である。雲ひとつなく、動くものもない空を時折渡ってゆく、あの底知れず深くやわらかな翳りのような。(6－182)

こうして、夫との閉ざされた愛の生活を後にして一人旅立った時から、いわば「個体化の原理」(principium individuationis)によって一定の時空に閉じこめられていたクラウディーネの自我は、そのくびきを解かれるのである。以前であれば嫌悪感をしか抱かなかった群集や、そりに乗り合わせた乗客たち、みすぼらしい教師たち、馬鹿気た月並みなことしか言わぬ参事会員の存在を身近なものに感じとり、そこへ向けて自我の境界が拡がってゆくのを体験する。他人の身体から発せられるものすべてが彼女に向かって押し寄せ、彼女は自分をもはや「区切る」(begrenzen)(6－184)ことができなくなる。自分という意識の確かさが失なわれる。

> 彼女ははじめて自分自身を、根底に至るまで不明瞭なものだと感じた。根を断ち、絶対性を破壊し、顔を持たない、愛における究極の自己感情を感じとった。この自己感情はいつもなら繰り返し彼女を自分自身にしてくれたが、今は誰からも区別してくれなかった。その時彼女は

再び駆りたてるもの、実現しなかったもの、どこをも住処としないものの中に身を沈めなければならないような気がした。(6－188)

自我感の根底が崩壊したこのような状態においては、自己という意識、唯一愛する人という想念は意味を喪失する。そこでは、一人の人を愛することは別の人を愛することであり、別の男を愛することは夫を愛することである。「私たちは互いに知り合う前から互いに不実だったのだ」という思いと、「私たちは互いに知り合う前から互いに愛し合っていたのだ」(6－174)という思いとは同じことなのである。見知らぬ男に欲望を促されることは夫を愛することになる。欲望に心震わせて男を待ちながら、「目に見えぬ彼方まで張り拡げられた陶酔」(6－173)がおののき走り、遠く離れた愛する人の心臓がさまよい歩く音を耳にする。存在の表面を見知らぬ男に委ねながら、夫とだけ分かち合っている何か、「内なる合一」(eine innere Vereinigung)(6－181)を感じ取るのである。

しかしながら、クラウディーネが体験した一体感とは、むろん愛する夫とのそれであると同時に、すべてとの(あるいは無との)、孤独でありながら魂の打ち震えるような合一でもある。そこでは個と個、人間と物、人間と獣との区別は存在しない。現実の世界を構成していく枠組の中に閉塞していた彼女は今や、世界とひそやかな交感を交すことになる。

彼女ははるか遠い戸外に立っているような気がした。彼女のまわりでは、空中の様々な音、空の雲がひっそり静まりかえって、それぞれ自分の場所と瞬間に身を潜ませていた。彼女はもはやそのような雲、そのような音にほかならなかった。何やら流れて行くもの、鳴り響くものにほかならなかった……彼女は獣たちの恋というものを理解できると思った……そして雲や物音の恋というものを。(6－182f.)

中世における「神秘的合一」(unio mystica)が人間の魂と神との合一体験であるのに対して、世俗化された20世紀における合一体験はこうして、Ich と Welt の間で行なわれる。[4] しかもこの物語における合一体験は、オプティミスティックな輝かしさに満ちた万有との融合でもなければ、根源的なカオスにおけるディオニュゾス的なオルギーでもない。虚無との

孤独な、消え入らんばかりにやさしい交信なのだ。まなざしはひめやかに交され、交される言葉はささやきなのである。豊かな形象を孕んだ万有へ向けての喜ばしい解放ではなく、誰も棲まない場所へ向けての出発なのである。

> わたしはいよいよ色あせていくのでしょう。人間は死んでゆく、いいえ、しぼんでいくのでしょう。そして、樹木も鳥も獣たちも。そして最後には、すべてはひとすじのごくほのかな煙に過ぎなくなるのでしょう……それからたったひとつの調べに……空中を流れてゆく調べに……虚無の上を流れてゆく……（6－193）

2

このように概観してみると、現実が偶然のものに過ぎないという認識から、その裏返しとしての、すべてのものとの神秘的合一へというクラウディーネの辿った道筋は、現におきたことをそうでないことよりも重要視しない男であるウルリッヒが、妹アガーテと神秘的な愛の体験を試みる過程を想起させる。それどころかこの『愛の完成』においては、現実とみなされている事柄の根拠を徹底的に突き崩すことが、そのまま神秘的なものへのささやきかけへと変じていく様が、未完に終わった上に、第一巻と第二巻の乖離を云々させる『特性のない男』に比べると、はるかに破綻なく描かれていると言える。

しかしながら、一応はそのような道筋に従って展開していると言えるこの物語は、そうした要約から想像されるようなイメージからはほど遠い。この物語を支配しているのは、神秘的な合一体験という究極へ向かう直線的な動きではないのだ。外的な出来事に焦点をあてる限りは、事は時間の経過に従って進行しているが、この作品の大部分は、クラウディーネが次から次へと紡ぎ出す内的連想によって占められていて、外的な出来事はそれにかろうじて形を与えている枠組に過ぎない。そして当然のことながら、クラウディーネの意識に生起する想念は、因果律に従って漸次的に進行してゆくのではない。同じ想念が様々に陰翳を変えながらも、同語反復的に幾度も現われてくるのである。

たとえば夫との神秘的合一という感情は、旅の始め、クラウディーネが男と出会うまでにすでに彼女の心に予感として現われている。

> そんな時彼女は、自分は他の男のものになれるかもしれないと考えることができた。しかも、それは彼女には不貞のようには思えず、むしろ究極の結婚のように思えた。どこやら二人がもはや存在しないところで、二人が音楽のようでしかなくなるところで、誰の耳にも届かず、何からも響きを返してもらえぬ音楽のようでしかなくなるところで。（6－165）

そしてその後も、幾度か異なる表現の下に、彼女が遠く離れた夫との間に目に見えぬ結びつきを体験することはすでに述べた。すなわち、夫との神秘的な合一感は、実は不貞を犯す前にすでに生じているのである。それどころか、実際に男と一つの部屋で向かい合った時、彼女は男に嫌悪感を覚え、「出て行って」と告げる。他の男との不貞を通して夫との合一感が実現されるという頂点へ向けて物語が進行してゆくのではなく、渦巻く想念が時折、夫とのないしは世界との合一という形をとって表層に現われ出てくるのである。というよりも、それと気付かぬうちにすでにある方向性を帯びた視線が、現実という統一体をうみ出すように、作品の中に何らかの意味を見い出そうとする志向が、言葉の渦の中からたとえば神秘的合一という特定の意味を選り分けるのである。

同様のことは、一元的な現実を成り立たせているものが、混沌とした無に対する恐れに過ぎなかったのだという想念にもあてはまる。この想念も、合一への志向と不可分に、物語の至る所に張りめぐらされているのであって、このような意識が生じて、そこから次第に融合へと向かって物語が展開していくわけではない。

ムージル自身が短編集『合一』について、「この書物のあやまりは書物だということだ。表紙と背とページ数を持っているということだ。ガラス板の間にこの本の幾ページかを拡げて、時々それを入れ替えるとよい。そうすればこの本の本質がわかるであろう」[5] と述べているように、この『愛の完成』もまた、いわばそのページを入れ替えて読むことも可能なほどに、ある一点へ向けて物語が収斂していくような構造とはおよそかけ離

れているのである。クライマックスと見えるものは、別の想念によってたちまちに押しやられ、新たな渦の中でずらされ変形されていく。したがって、この見通しにくい物語を、「愛の完成」とか「神秘的合一」といったテーマに収束させようとする読みは、この作品の運動そのものからはじき返されてしまう。

しかしながら、こうしてこの作品にひとつの中心を据えることを拒んだとしても、それでもなお、ひとつの問いが残る。言葉では言い表わせぬ事柄を何とか表現しようと言葉の限りを尽して格闘しているかのようなこの物語が、結局はどこへ行こうとしているのかを確かめたい気持ちを、どうしても拭い去ることはできないのである。それは、「彼女は［……］かつて春の日に感じたことを思い起こしているような気がした。それは、すべての人のために存在するようでいて、しかもたった一人の人のためにというように存在することもできるのだという思いであった。そして、子供たちが神様のことを、神様は偉いんだと言うように、彼女ははるか遠くに自分の愛の姿を思い浮かべた」（6－194）というこの物語の終わりの文章は、結局クラウディーネが旅の果てにたどりついたということを意味するのかという問いでもある。

3

ウルリッヒや『トンカ』*Tonka* の主人公と同様、クラウディーネにとって現実は、分節化されていない混沌を、一義的な意味付けによってかろうじてつくりあげたものに過ぎなかった。ある意味付けが必然である根拠はないのである。自己も意味も、他との関係によって決定される Funktion であると同時に、無に耐えるための Fiktion なのである。ニーチェ（Friedrich Nietzsche）が看破したように、科学的真理さえ「ひとつの主観的虚構」に過ぎない。世界とは我々が秩序付け、単純化し、人為的に分節化したものなのであり、「主観、実体、『理性』などという虚構された世界」[6] を我々は必要とするのである。現実の世界そのものが存在するのではなく、現実の世界とはこういうものであるという信仰のみが存在するのである。

『愛の完成』が書かれた時期[7] ── いわゆる世紀転換期 ── は、科

学的な思考の前提をも含めて、これまで確かなもの、自明のものとみなされてきたものの根拠が徹底的に問い直された時代であったといってよい。[8] それ自体として存在することが自明のものとして生を統べてきたものが虚構であることが暴露され、生を従来通りの統一体としてとらえることはもはや不可能となったのである。このような状況、生を統べてきた光源が見失なわれ、個々のものがそれぞれの力を主張するカオスへと解体してしまった状況、すなわちデカダンスの状況を認識することから出発しなかったような20世紀の作家はいなかったと言ってよい。ムージルがいかに自分を、同時代の作家とは孤立した存在だと考えていようとも、ムージルもまたまぎれもなく時代の子であった。

しかしながら、同じくデカダンな状況の認識から出発したとしても、それをどのような形で文学化するかということになると、いくつかの様態が考えられる。ひとつには、中心なき混沌に解体してしまった世界にひたすら身を任せ、その刻々とうつろう様を従来の遠近法とは別のやり方で描こうとする文学がある。「あらゆる文学上のデカダンスは何によって特色付けられるのか。生がもはや全体には宿っていないということによって。言葉が至高のものとなって文章からとび出し、文章は増殖してページの意味をかすませ、ページは全体を犠牲にして生命を得る ── 全体はもはや全体ではない」[9] というニーチェの有名な言葉がこうした文学にはあてはまるであろう。ムージルの『愛の完成』にもこのような傾向を指摘することはできよう。ここでは、言葉は次から次へと言葉を引き寄せ、全体の調和を破ってページの上に蔓延しているかの感がある。

それに対して、現にそうであるとみなされている現実がそうであることの無根拠さをあばきながら、それを越えたところに真の現実を求めるという志向がある。たとえばフェルマン（F. Fellmann）は、表現主義の特色を、所与の現実を突破することによって、一層高次の本来的な現実に到達することを目指す志向に求めている。[10] それは別の言葉でいえば、バラバラにされた連関を、もう一度新たな全体性へと統合しようとする志向である。デカダンスの分析から出発した作家たちが、失なわれた現実との接点を、より大きな視野の中で取り戻すべく努めたり、神話的なものの中に、現にある涸渇した現実からは失われたより根源的なものを求めた例には事欠かない。ムージルの中にも、確固としているかに見える現実

が混沌へ解体してしまう状況に対する鋭敏な触覚、犀利な分析と並んで、現実の背後に潜むものへの志向があることは否めないであろう。『特性のない男』において常に問題とされる「別の状態」(der andere Zustand)、あるいは「真の生」(das rechte Leben) という想念には、現にある現実とは別の、求めるべき次元があるかの印象を与える側面がある。『愛の完成』の中にも、たとえば、「現実の体験のあらゆる結び付きの背後に、何かが見い出されぬままに流れていた。彼女は彼女の生のこの隠された本性をまだ一度もとらえたことはなかった」(1－161) とか、すでに引用した「日常的な理性の世界とは、随意にしか、偶然にしか、ひっそりと束の間にしか結びつかない、ひとつの独立した把えがたい感情の世界」などの表現があって、現実の背後についには見出されるべき何かが存在するかの印象を与える。

しかしながら、「別の状態」というのは、カルトハウス (U. Karthaus) の表現を借りれば、「経験的な現実の傍らや背後に存在するという意味での第二の現実」なのではなく、むしろ「経験的な現実性の根拠であり、条件」[11] なのである。それは「区分されていない無定形の複合体」(ein ungegliederter, amorpher Komplex)[12] ともいうべきものであって、それが方法論的な要求によって選り分けられ、分節化されて現実が生ずるのである。したがって、「別の状態」こそが経験的な現実を成り立たせる場であるといえる。ムージルが、自我をも含めて、現実の成立を可能ならしめているものが虚構に過ぎないことを繰り返し描くのは、そうした状態を否定さるべきものとみなしているからではない。マヌー (J. Magnou) の言うように、「この『自我の不安定性』は、それに苦悩や憤りをこめて診断を下した他の作家たちとは反対に、ムージルによってその登場人物たちの中で、まさに『得ようと求め』られたと言ってもよかった」[13] のである。

否定さるべきは、対象や自我を実体とみなして、世界や現実を所与のものとして固定的に把えることなのである。世界が「諸々の関連の無限の体系」(1－251) であって、そのような体系の中では、「通常の生が、最初の大雑把な接近によって行為や特性に付与しているような独立した意味は、そもそも存在していなかった」(1－251) のであればこそ、これまでの連関を解体して新たな連関をうちたてることができるのである。した

がってムージルにとって問題となるのは、固定化された現実の背後に、これまで覆い隠されてきた世界の真の姿や、本来の自己自身を見い出すことではなく、絶えず新たな結び付きや新たな連関をうみ出すことのできる場を、そうしたものとして認識することなのである。別の物語の糸を見つけ出すことを目指して現にある物語の糸を断ち切るのではなく、結び目のない物語の糸を絶えず見つけること、それを無限に続けることなのである。「別の状態」も、それが「常態」となればもはや「別の状態」とは言えない。新たな連関は、再び解体されるためにのみつくりあげられる。

ムージルの作品を前にした時我々は、常にある種のとまどいを覚える。すなわち、かくも冷徹で諷刺の毒を持つ精神が、現実の只中にあって世界が神秘的としか表現できないものへといつの間にか変貌を遂げる様を描く際の ── しかしここで再度確認しておくと、これはムージルにとってはあくまでも厳密な認識の結果なのである ── ほとんど帰依者めいた筆致に対してである。この『愛の完成』にしても、黙した混沌、冷たい陶酔、厳格な叙情といった背反語を無際限に続けたくなるような印象の果てに、一筋の拭いようのない憧憬の思いが存在するのが感じられる。また『特性のない男』の第二巻が、第一巻に顕著な社会批判的、諷刺的な要素を随所にとどめてはいるものの、全体としてみれば愛のユートピアにその重点があることは疑い得ない。その場合、たとえばゴルトシュニック（D. Goltschnigg）のように、ウルリッヒはアガーテとの愛において持続的ではないにせよ、神秘主義（Mystik）の本質を成す合一を体験し、そのことによって特性の獲得＝真の自己との遭遇を果したのだと解釈する論者もいる。[14] 世界の中での居場所を喪失していた自己が、他者を媒介に本来の自己を見い出す過程をムージルの作品に見るのである。そして、これは何度もくり返すことになるが、そのような解釈を許すものがムージルの作品には確かに存在するのである。

それに対して、ムージルの作品の中にある解体的な力、すなわち、実体論的思考や意味の神学に対する徹底的な批判を重要視し、そのことに極めて現代的な特色を認める論者もいる。たとえばマグリス（C. Magris）は、ムージルの作品の中に、失なわれた全体性に対する憧れの存在することを認めながらも、ムージルを何より、世界を本質的なものに還元し、意味の統一の中に閉じこめようとする「偉大な文体」（der große Stil）

の粉砕者とみなす。ニーチェやハイデガー（M. Heidegger）が、世界にひとつの意味を課そうとする形而上学の暴力を砕こうとしたのと同じ力を、ムージルの作品に見ようとするのである。[15] ニーチェと同じくムージルは、古典的な思考の前提である統一的現実を、無限のパースペクティヴに、絶えざる脱構築的な解釈に分解する。この戯れの背後には解釈の主体はなく、ただ解釈の自律的運動があるのみである。ムージルのオデュッセウスは、他者と出会うことによって自己を成熟させ、結局は自己のもとに帰還するのではない。彼の放浪は、終わりも帰還もない放浪であって、極限にたどりついたと思うと存在の新たな位置配列（Konstellation）や解釈に出会う。自己は絶えず前方へ自らを投企し続けるのである。[16]

ハイト（D. Heyd）も同様に、『特性のない男』を、「千年王国」（das tausendjährige Reich）や「楽園」（Paradies）において実現されるかもしれないような意味の神学に対する批判とみなす。彼は、『特性のない男』において描かれている「特性のなさ」（Eigenschaftslosigkeit）と「神秘主義」との親近性を一種の戦略だと述べている。（ちなみに、クラウディーネは die Frau ohne Eigenschaften だと言える。）つまりムージルのテクストは、神秘主義のディスクールを無視したり、飛び越えたりすることなく、その中に巧みに入り込みつつそれを解体し、結局のところ、非終末論的、非目的論的な空間を開いているというのである。[17]

ムージルの作品にみられる神秘主義への傾斜は、神（＝根源的一者）との合一体験という本来の神秘主義の身振りに沿いつつも、それを突き崩しているのだというこのような解釈は、『愛の完成』についても妥当するのではないだろうか。

すでに確認したようにこの作品においては、一瞬一瞬において様々な可能性のひとつを選択してきた結果の総和である自我は、それ故偶然的なもの、とりかえ可能なものであるという認識が、クラウディーネに万有との合一感を可能にした。したがってここで言う合一とは、かつては存在しながら今では失なわれた全体性を取り戻すことではなく、絶えず新たな存在の解釈や可能性に出会う無限に開かれた場に出ることであった。全く見知らぬ男との不貞によって夫との合一が可能であるとしても、それが、夫との愛が偶然に過ぎないということの上に成り立っているのであれば、愛の完成は、愛の完成を可能ならしめた当のものによって突き崩されることに

なる。合一は解体によってのみ可能であり、解体は合一を促す。こうして合一＝解体という構図は、解体 ── 構築という循環を無限に繰り返すことになる。したがって「すべての人のために存在するようでいて、しかもたった一人の人のためにというように存在することもできる」というクラウディーネの最後の感慨は、物語の成立を可能にした「自分は他の男のものになれるかもしれない」という思いと本質的には同じことであって、ここから再び、不貞＝愛の完成という物語（あるいは物語の止揚）を繰り広げることができるのである。旅の果てはこうして新たな旅の始まりとなる。しかし、それは同じことの反復であって、そうではない。無表情に屹立する物たちの間で夜半に目覚めた時、銀色の雪の降り積もる街を一人走り抜ける時、幻想的な高揚の中で物が揺らぎ、家々が不可能な形をとり始めるように、世界はクラウディーネの前にその都度、これまでとは別の視線によって切り取られた未知の相貌を示すはずなのである。

しかしながらそれにしても、現実の成立を可能にしているものが現実という統一体に対する信仰であるという存在の罠を逆手にとって、微妙に、時には思いがけなく変貌する世界を次々に織り上げる時、それに似つかわしい軽やかさから、ムージルの文学がかくも遠いのは何故であろうか。この問題についての考察は別の稿に譲りたい。

テキスト

Robert Musil: *Gesammelte Werke in neun Bänden.* Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978.
引用箇所は、本文中の引用文の後の括弧内に巻数とページ数を記した。また、注においてこの全集を示す場合には、MGWと略記する。なお『愛の完成』の訳文に関しては、筑摩世界文学大系64『ムージル・ブロッホ』 昭和48年 所収の古井由吉訳を参考もしくは借用させていただいた。

注

1 Musil: *Tagebücher.* Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1983, S. 232.

2 Helmut Arntzen: *Musil Kommentar sämtlicher zu Lebzeiten erschienener Schriften außer dem Roman „Der Mann ohne Eigenschaften"*. München 1980, S. 111f.

3 他の作家の Untreue による Treue というモチーフに関しては下記を参照のこと。

Gerhart Baumann: *Robert Musil. Zur Erkenntnis der Dichtung.* Bern 1965, S. 134.

Karl Corino: *Robert Musils „Vereinigungen"*. München 1974, S. 289.

4 Dietmar Goltschnigg: *Mystische Tradition im Roman Robert Musils. Martin Bubers „Ekstatische Konfessionen" im „Mann ohne Eigenschaften"*. Heidelberg 1974, S. 23.

5 Musil: *Tagebücher*, S. 347.
この書物とは正確には短編集『合一』のこと。

6 Friedrich Nietzsche: *Werke in drei Bänden.* Hrsg. von Karl Schlechta. München 1973; 7. Auflage. Bd. 3, S. 543.

7 1908年から1910年にかけて執筆された。

8 ムージルは、自然科学においても堅固なものに対する信頼が揺らいできていることを、たとえば次のように述べている。

合理的な領域を支配しているのは［……］堅固なものという概念であるといえよう。ここでも、最も深い所で地盤が揺らいでいる。数学の最も深い基盤が論理的に不確かになり、物理学の法則は近似値的にしか妥当せず、天体はどこにも場所を持たない座標系の中を運動している。(MGW 8—1027)

9 Nietzsche: *Werke.* Bd. 2, S. 917.

10 Ferdinand Fellmann: *Phänomenologie und Expressionismus.* Freiburg/München 1982, S. 54.

11 Ulrich Karthaus: *Der andere Zustand. Zeitstrukturen im Werke Robert Musils.* Bern 1965, S. 114.

12 Musil: *Tagebücher*, S. 214.

13 Jacqueline Magnou: *Grenzfall und Identitätsproblem oder die Rolle der Psychopathologie in der literarischen Praxis und Theorie Musils anhand der Novellen „Vereinigungen"*. In:

Sprachästhetische Sinnvermittlung. Robert Musil Symposion Berlin 1980. Hrsg. von Dieter P. Farda／Ulrich Karthaus. Frankfurt am Main 1982, S. 113.

14 Goltschnigg: a. a. O., S. 168.

15 ムージル自身、例えば次のように述べている。

哲学者というのは、軍隊は持たないが故に、体系の中に閉じ込めることによって世界を支配する暴君である。(MGW 1—252)

16 Claudio Magris: *Hinter dieser Unendlichkeit — Die Odyssee des Robert Musil*. In: *Beiträge zur Musil-Kritik*. Hrsg. von Gudrun Brokoph-Mauch. Bern 1983, S. 49—62.

17 Dieter Heyd: *Musil-Lektüre: der Text, das Unbewußte. Psychosemiologische Studien zu Robert Musils theoretischem Werk und zum Roman „Der Mann ohne Eigenschaften"*. Frankfurt am Main 1980, S. 38, 172.